

結城市文化財調査報告書第6号

結 城 廃 寺

第3次発掘調査概報

1991

結城市教育委員会

序

結城市は、豊かな自然に恵まれ、古より栄えてきたことが、市内に散在する数多くの遺跡から伺えます。

なかでも、奈良時代の初期に成立し中世に至る間、この地方一帯の中心寺院として栄えたと伝わる『結城廃寺』の存在を詳らかにすることは、本市の歴史を考える上で大きな課題でした。

この、結城廃寺跡の重要性をかんがみ、国庫及び県費補助事業として、寺域・伽藍配置を確認するための発掘調査を進めているわけです。これまでの調査を含めて、多大な考古学的成果が得られていますが、遺跡の全貌を把握するには至っておりません。

今後も、本市の文化財保護行政の主要施策として、調査を進めていきたいと考えています。

調査にあたりましては、文化庁、奈良国立文化財研究所をはじめ、茨城県教育委員会、高井悌三郎先生、坪井清足先生にご指導・ご助言を、また、土地所有者、地元の方々には格別のご協力を賜り、ここに厚く御礼申し上げます。

平成3年3月

結城市教育委員会委員長 福田友一

例 言

1. 本書は、結城市教育委員会が実施した結城市大字上山川字結城寺北、大字矢畑字結城寺前外に所在する、結城廃寺の第3次発掘調査概報である。
2. 調査は、平成2年度国庫補助事業として実施された。
3. 調査期間は、平成2年7月11日から平成3年3月29日まで約8カ月間行い、調査面積は約950m²である。
4. 発掘調査は、奈良国立文化財研究所・飛鳥藤原宮跡発掘調査部の大脇潔、川越俊一、立木修、岩永省三の指導により、結城市教育委員会社会教育課文化係の斉藤伸明が担当した。
5. 遺構の表示は、SB（建物跡）、SC（回廊跡）、SD（溝状遺構）、SI（住居跡）、SX（性格不明遺構）で示した。
6. 遺構の位置表示には国土地理院第IX座標系を使用し、水準は海拔標高である。
7. 遺構・遺物の写真撮影は斉藤が担当し、航空写真撮影は明和運輸有限会社、埴仏・舍利孔石蓋の写真撮影は奈良国立文化財研究所・飛鳥藤原宮跡発掘調査部の井上直夫の協力を得た。
8. 本書の執筆、編集は斉藤が担当した。
9. 本調査にあたり、下記の方々にご指導、ご助言をいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

栃木県風土記の丘資料館、鹿島町教育委員会、協和町教育委員会
阿久津久、大川清、大谷昌良、片平雅俊、瓦吹堅、川井正一、
黒沢彰哉、斎藤新、鈴木嘉吉、高井悌三郎、鶴見貞雄、坪井清足、
中村厚子、平川南、藤田安通志、山野井哲夫（敬称略）

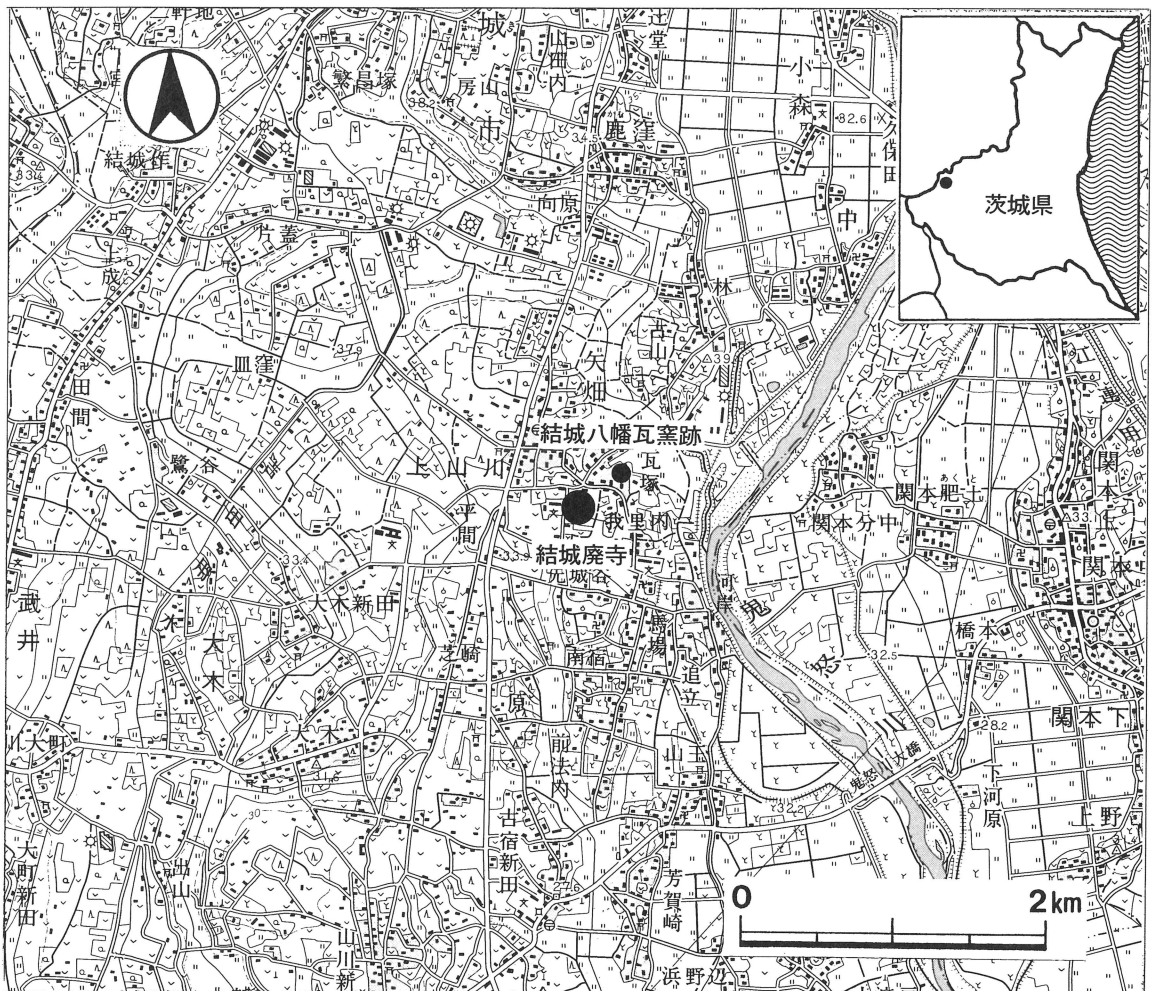
目 次

1. はじめに	1
2. これまでの調査	3
3. 調査の経過	6
4. 調査の成果	9
東面回廊跡	9
掘立柱建物跡	10
北 溝	15
第1号堅穴式住居跡	16
西 溝	17
第2号堅穴式住居跡	19
東 溝	21
第3号堅穴式住居跡	22
5. おわりに	25

1. はじめに

結城市は、茨城県の県西部、栃木県との県境に位置し、東を流れる田川、鬼怒川を境として下館市、関城町と接し、西を流れる江川、西仁連川を境として三和町、栃木県小山市と接し、南は八千代町と接している。また、古代においては、結城郡として下総国の西北端に位置し、西は下野国と、東は鬼怒川を境として常陸国と接していた。

結城廃寺は、結城市のほぼ中央部の東寄り、鬼怒川の西岸台地上にあり、当地には結城寺北、結城寺前、寺山といった地名が残されており、今でも約200m四方にわたって瓦の散布がみられる。創建は奈良時代初頭で、平安時代中期に火災によって一度焼失したが、その後再建され、室町時代中期の結城合戦の時に兵火によって再び焼失し、そのまま廃絶したと考えられている。なお、廃寺の北東約500mには、廃寺の創建期の瓦を供給した結



第1図 遺跡位置図



第2図 結城廃寺周辺航空写真

城八幡瓦窯跡がある。

現在、廃寺跡の大半は桑畑や麦畑等の耕地であるが、周辺では宅地化がすすんでおり、今後、遺跡の保存を図るうえで、遺構の遺存状況や廃寺跡の範囲を確認するため、結城市教育委員会が主体となり、奈良国立文化財研究所・飛鳥藤原宮跡発掘調査部の指導のもと、昭和63年度に市の単独事業として第1次調査を行い、平成元年度の第2次調査からは、国庫補助事業として調査を行っている。

2. これまでの調査

結城廃寺に関連する最初の発掘調査が行われたのは、昭和28年、高井悌三郎氏による結城八幡瓦窯跡の調査である。瓦窯跡は廃寺の北東約500mのところであり、寺の創建期の瓦を供給したもので、1基が確認されている。

その後、昭和56年には、上山川就業改善センター建設工事にともなう調査によって、寺域西限の大溝の一部が検出され、昭和57年には、回廊に使用されたと考えられる礎石が耕作中に発見されている。更に、昭和58年には分布調査が、昭和60年にはレーダー探査が行われ、こうした成果をもとに、昭和63年度より発掘調査を実施することになった。なお、各年次の調査期間は次のとおりである。

第1次調査 昭和63年7月4日～昭和63年10月27日

第2次調査 平成元年8月7日～平成元年12月9日

第3次調査 平成2年7月11日～平成3年3月29日

第1次調査

第1次調査では、回廊跡の南西隅が検出され、礎石はすべてとり除かれていたが、礎石の下の根石が検出されたことにより、回廊幅が約6m、柱間寸法が3.6mの単廊であることが確認された。また、回廊跡の内側に掘り込まれた2基の瓦溜からは、多量の埴仏をはじめ、塑像や極先瓦が出土し、さらに焼土や炭化材も出土したことから、瓦溜が作られた10世紀頃に、寺が一度火災によって焼失し、その後、再建されたことが推定された。埴仏は、阿弥陀如来坐像、観音菩薩立像など約10種、50余点が出土し、その出土量の多さは、近畿地方以外では、三重県名張市の夏見廃寺に次ぐものである。また、西面回廊跡から約66m西側のところで、寺域の西限を区画する西溝も検出された。

第2次調査

第2次調査では、中門跡、塔跡、北方建物跡、西溝などが検出された。中門跡は、掘り込み地業の東側約2分の1を検出し、その規模は、南北12m、東西を復元すると約17.5m



第3図 塔跡 (南から)



第4図 中門跡 (南から)



第5図 阿弥陀如来三尊像塼仏



第6図 塔心礎・舍利孔石蓋

となる。塔跡では、掘り込み地業と塔の中心に据えられた心礎を検出した。掘り込み地業の深さは約1.6mで、掘り込み地業の規模から推定される基壇の大きさは、一辺が約11mとなる。塔心礎は直径が約1.6mの隅丸方形で、中央には舍利孔があり、舍利孔に残されていた石蓋には、5弁の連華文が描かれていた。北方建物跡は掘り込み地業の東南隅が検出されたが、伽藍中軸線上に建てられていると考えられ、掘り込み地業の東西幅を推定復元すると約29.5mとなる。

3. 調査の経過

第3次調査は、平成2年7月11日から平成3年3月29日まで約8カ月間行われ、調査区は、東面回廊跡を検出するためにⅠ区を、北面回廊跡および北溝を検出するためにⅡ区を、西溝の南西隅を検出するためにⅢ区を、東溝を検出するためにⅣ区を設定しておこなった。

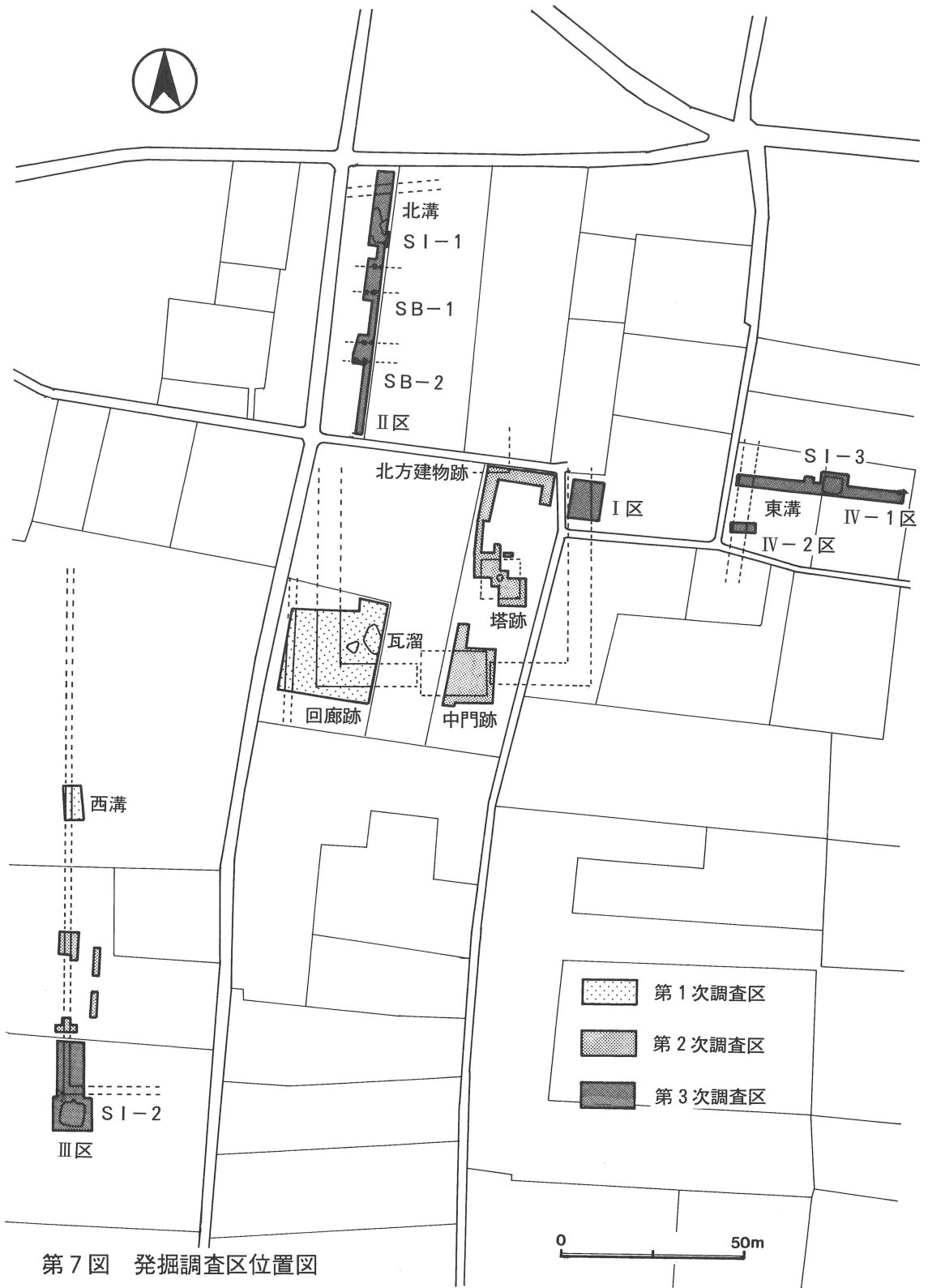
調査は、Ⅲ区から行った。最初に、溝の南西隅を検出するために、第2次調査で検出された西溝の南端から約20m南側の地点に調査区を設定した。しかし、竪穴式住居跡が検出されたため、約15m北側で再度調査区を設定し、西溝がさらに南へ延びていることを確認した。その後、順次調査区を南側に拡張し、最初の調査の調査区と繋がるまで拡張した時点で溝の南西隅を検出した。

次に、東面回廊跡を検出するためにⅠ区の調査を行った。Ⅰ区は、第2次調査で検出した中門跡より推定した伽藍中軸線から西面回廊跡までの距離と、同じ距離だけ伽藍中軸線から東へ測った地点に調査区を設定し、東面回廊跡を検出した。

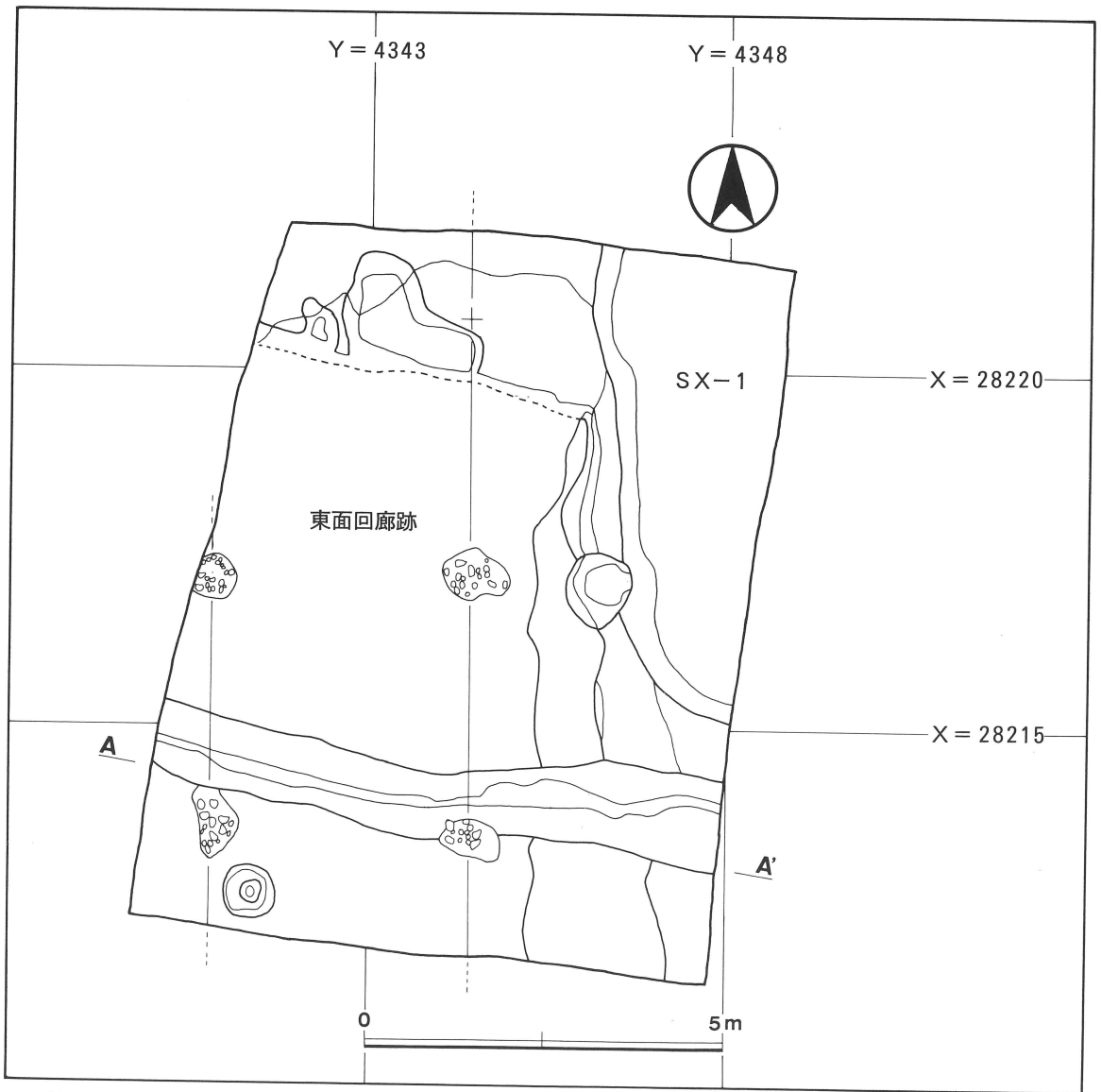
Ⅱ区は、はじめに北面回廊跡が第2次調査で検出した北方建物跡の側面部中央に取り付くと想定して調査区を設定したが、検出することができなかったため、回廊が北方建物跡の北側まで延びていると想定して、調査区をさらに北側へ拡張したが、やはり、北面回廊跡を検出することはできなかった。その後、北溝を検出するまで調査区を順次北側へ拡張し、その過程で掘立柱建物跡2棟や竪穴式住居跡を検出した。

最後にⅣ区の調査を行った。まず、東溝を検出するために、伽藍中軸線から西溝までの距離と同じ距離だけ東へ測った地点に調査区を設定したところ、Ⅲ区で検出した竪穴式住居と同時期と考えられる竪穴式住居跡を検出した。そのため、Ⅲ区で検出した住居跡は寺域の外側に建てられていたので、この住居跡も寺域外に建てられていたと想定して、調査区を西側に拡張し、東溝を検出した。最後に、廃寺跡に関連する遺構の有無を調べるために調査区を東側に拡張して調査を行った。

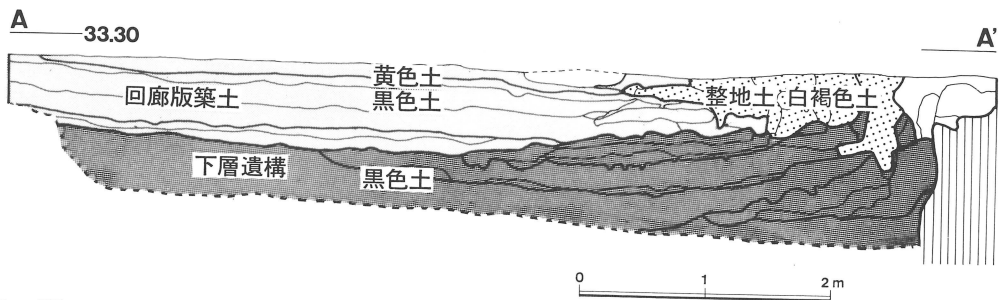
調査終了後は、遺構の保護のため、川砂を約10cm程敷いてから埋め戻しを行った。



第7図 発掘調査区位置図



第8図 I区実測図（東面回廊跡）



第9図 回廊跡断ち割り土層図

4. 調査の成果

本年度の調査で東面回廊跡を検出したことにより、第1次調査で検出した西面回廊跡との距離から、伽藍中軸線を確定することができた。また、掘立柱建物跡2棟や竪穴式住居跡3軒、寺域を区画する西、北、東溝を検出した。このうち、西溝の南西隅を検出したことにより、創建期の寺域の南限を確定することができた。

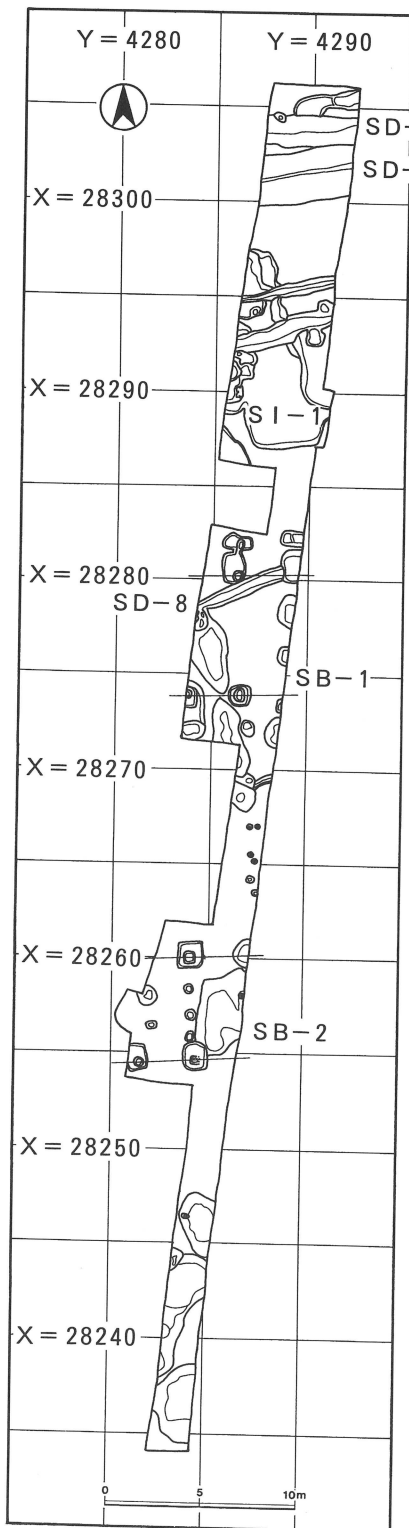
I 区

東面回廊跡（SC-1）

東面回廊跡の一部を検出した。回廊の西縁部は検出されなかったが、これまでに検出した西面、南面回廊跡と同じく回廊幅は6mと考えられる。礎石は取り除かれていたが、礎石のしたには、5～30cm程の大きさの河原石を用いた根石が4カ所検出され、そこから復



第10図 東面回廊跡（SC-1・南から）



第11図 II区遺構配置図

元される柱間寸法は3.6mで、第1次調査で検出した西面回廊跡の根石群と同じ寸法である。掘り込み地業の深さは約70cmで、西面回廊跡の約30cmの2倍以上であるが、これは東面回廊跡の下に下層遺構があり、他の場所よりも地盤が柔らかくなるため、その分、掘り込み地業を深くして基礎を安定させたためであろう。掘り込み地業の最下層には黒色土を多く混入した黄色土を敷いて版築を行い、その上に黒色土を、さらにその上に黄色土を敷いて版築を行っている。根石はこの黄色土版築層から検出された。また、回廊跡の外縁部からは、白褐色土の整地土が一部検出された。東面回廊跡の主軸は真北である。なお、西面回廊跡の外縁から東面回廊跡の外縁までの距離は約74mである。

東面回廊跡下の下層遺構は、伽藍建物の基壇を構築する時に用いる黄色土を採取するための土取り穴と考えられ、主に黒色土を用いて埋め戻されており、規模は明らかでないが、同様の遺構が、西面回廊跡下や第2次調査時の塔跡下からも検出されている。

なお、回廊跡の東側には浅い落ちこみ（SX-1）があり、中からは多量の瓦が出土した。

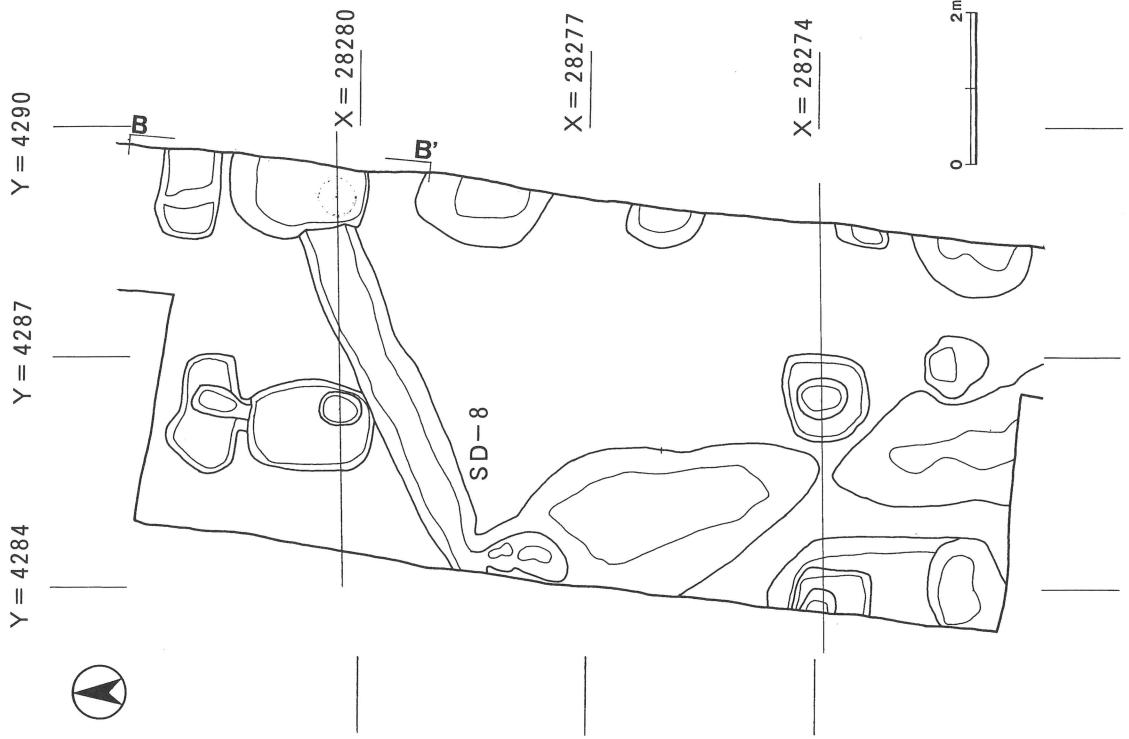
II 区

掘立柱建物跡（SB-1・2）

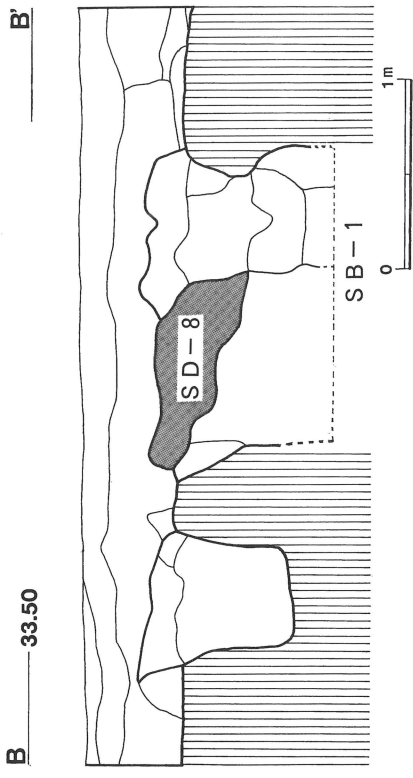
掘立柱建物跡は、II区のほぼ中央で2棟検出された。ともにごく一部を検出したのみで、全体の規模は不明であるが、回廊で囲まれた中心伽藍建物の北側に建てられており、かつ東西に長い建物跡になると想定されることから、僧坊など付属施設と考えられる。

第1号掘立柱建物跡（SB-1）

掘立柱建物の柱掘方を4か所検出した。柱掘方の大きさは径約1mの方形ないしは円形で、その中に径40~50



第12図 第1号掘立柱建物跡 (SB-1) 実測図



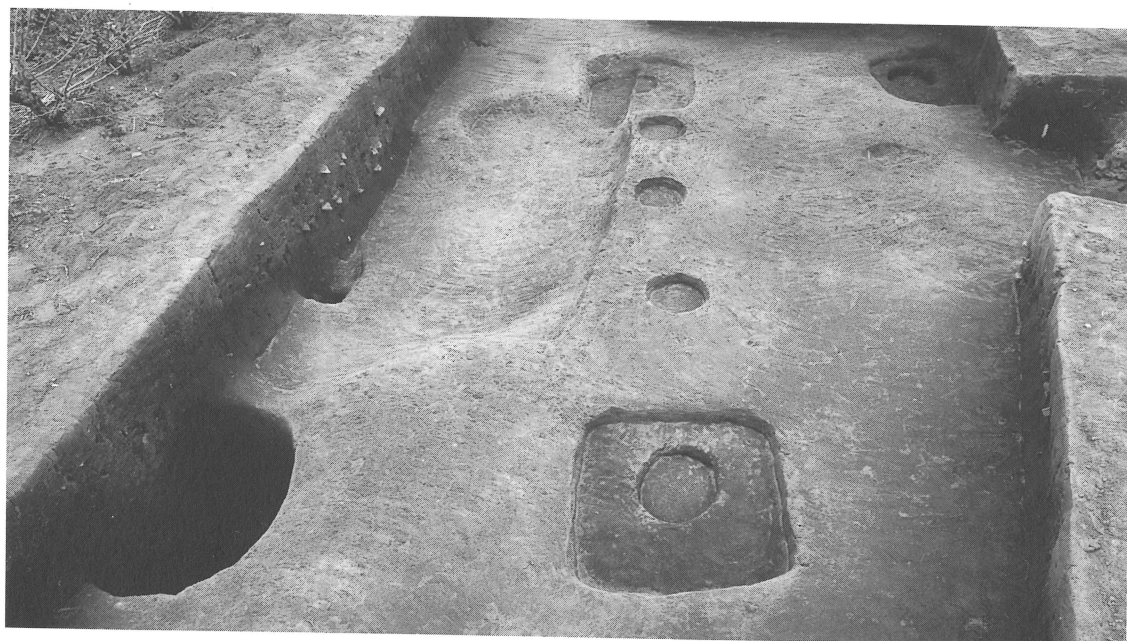
第13図 第1号掘立柱建物跡 (SB-1) 柱掘方土層図



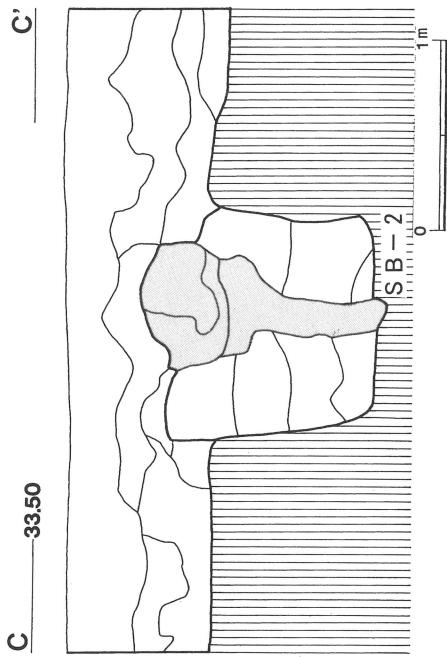
第14図 第1号掘立柱建物跡 (SB-1) 柱掘方土層 (西から)



第15図 第1号掘立柱建物跡（SB-1）（北から）



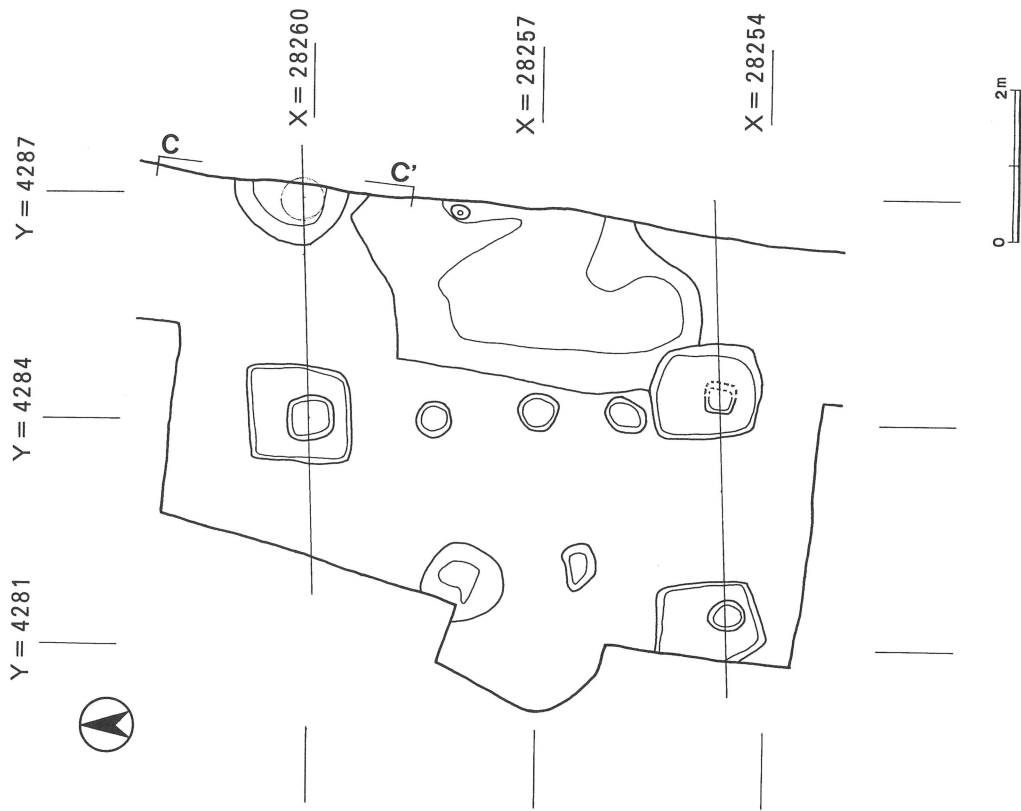
第16図 第2号掘立柱建物跡（SB-2）（北から）



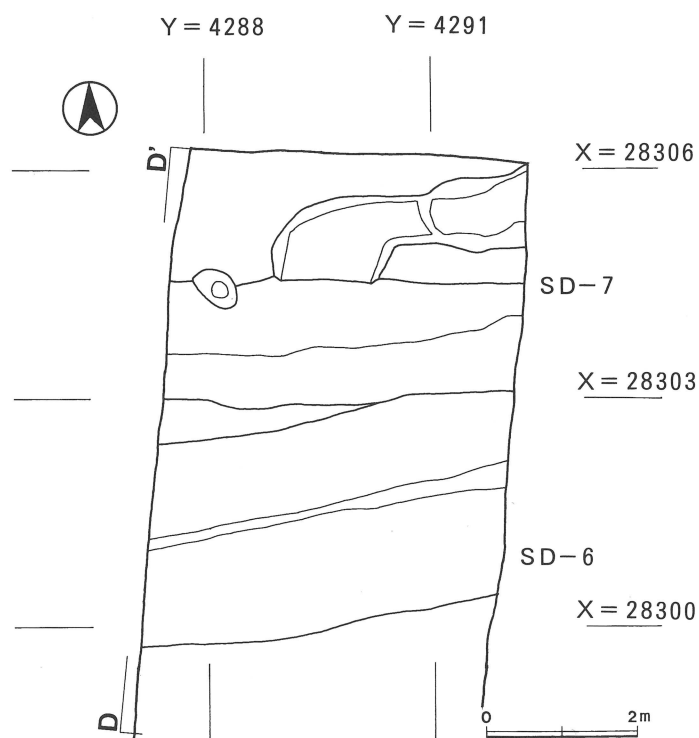
第18図 第2号掘立柱建物跡 (SB-2) 柱掘方土層図



第19図 第2号掘立柱建物跡 (SB-2) 柱掘方土層 (西から)



第17図 第2号掘立柱建物跡 (SB-2) 実測図

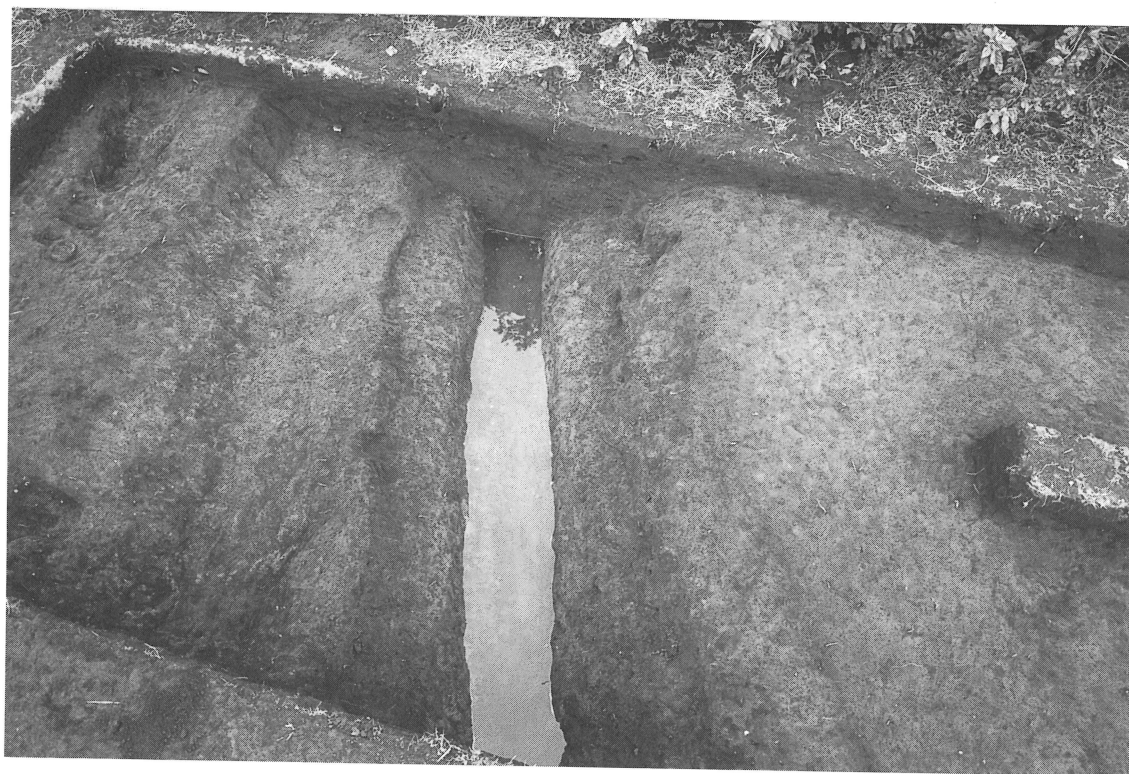


第20図 北溝 (SD-6) 実測図

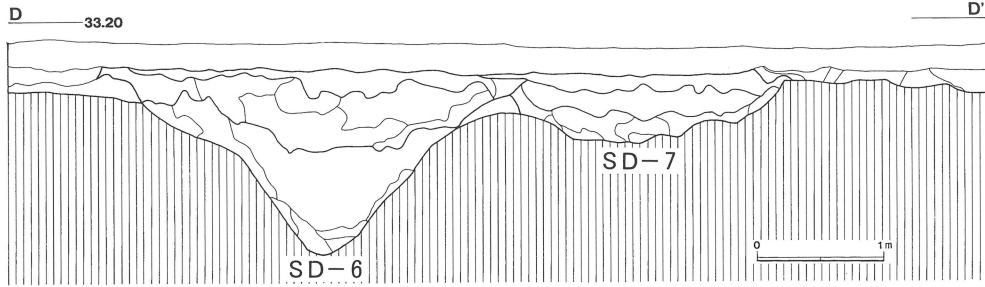
cmの柱痕跡が残っている。柱間寸法は、南北が約6.3m東西が約2.8mで、主軸はN-1°-Wである。

第2号掘立柱建物跡 (SB-2)

第1号掘立柱建物跡の南側約12mのところ検出された。第1号掘立柱建物跡と同じく柱掘方を4か所検出しており、大きさは径約1mの方形で、径40~50cmの柱痕跡が残っている。なお、柱痕跡の上層には白色粘土の多く混じった土が堆積し



第21図 北溝 (SD-6・西から)

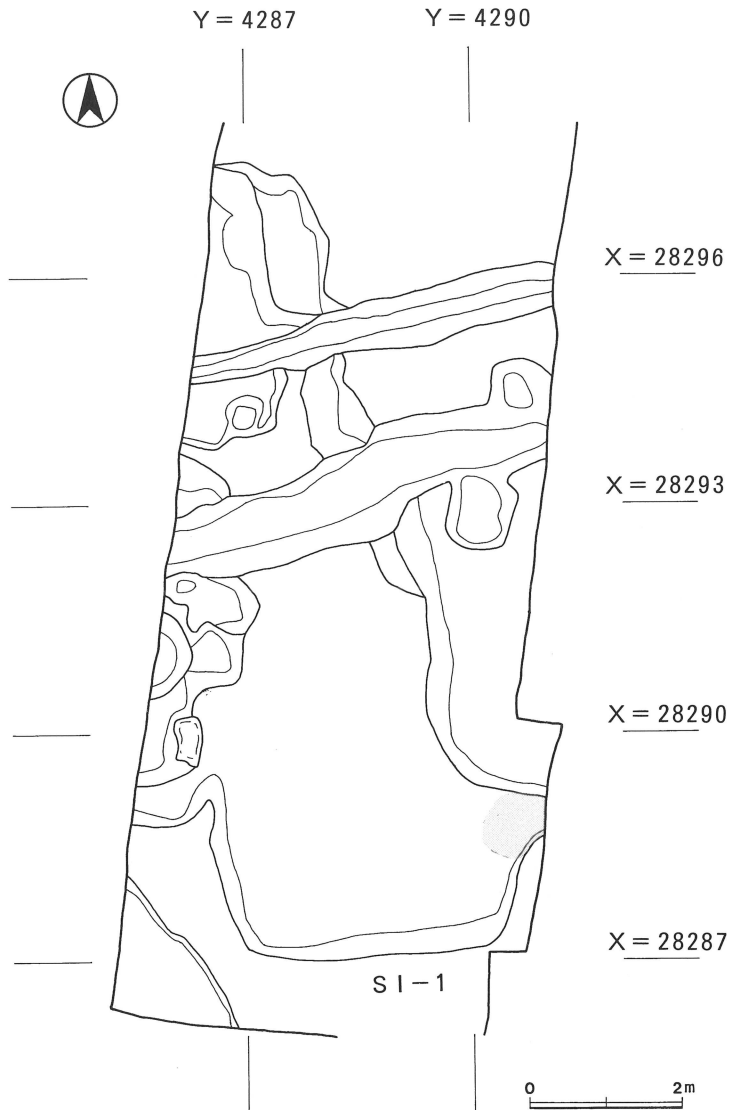


第22図 北溝 (SD-6) 土層図

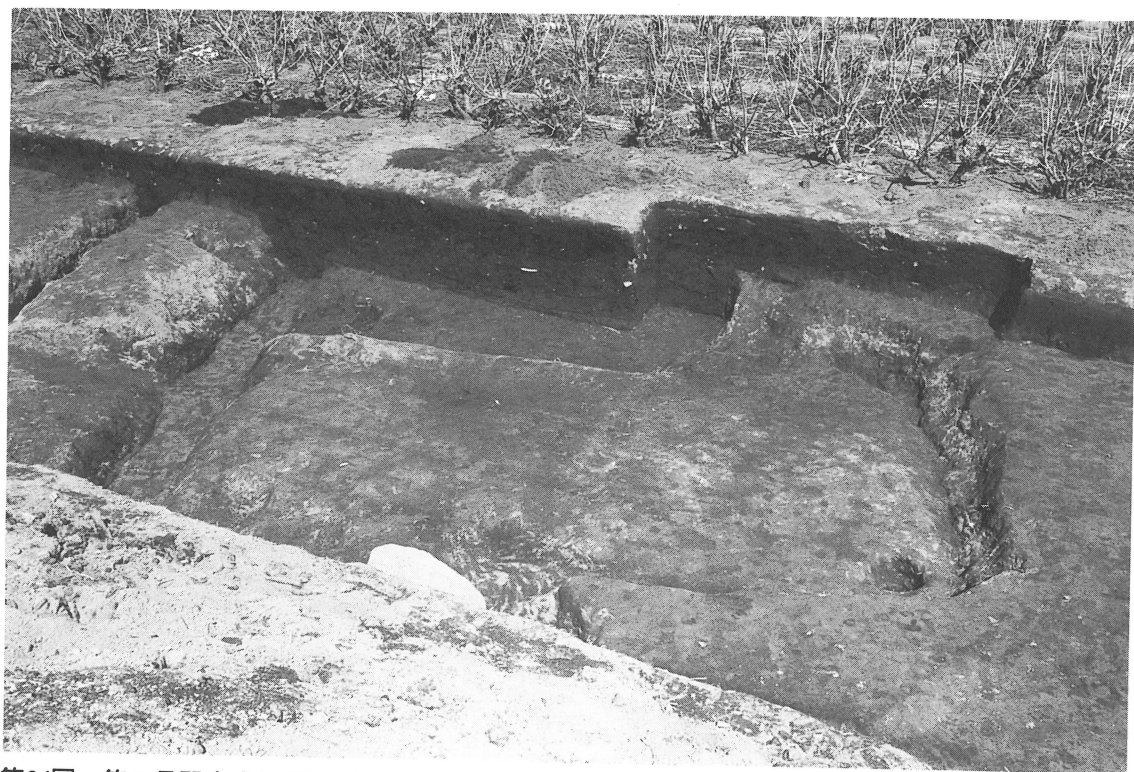
ている。柱間寸法は、南北が約 5.4m と第 1 号掘立柱建物跡より 0.9m 程狭く、東西は約 2.9m である。主軸も $N-3^{\circ}-W$ と、第 1 号掘立柱建物跡とやや異なっている。

北溝 (SD-6)

北溝は、II 区の北端、第 1 号掘立柱建物跡から約 20m 北側のところから検出された。大きさは、上幅が 2.8m、底幅が 0.4m、深さが 1.2m で断面は「V」字形をしている。検出された北溝は、寺域の北限を区画する大溝と考えられるが、これまでに検出された西溝よりも規模が大きいうえ、形態も異なっている。主軸は $N-79^{\circ}-E$ である。

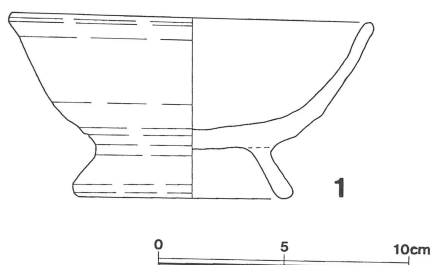


第23図 第1号竪穴式住居跡 (SI-1) 実測図



第24図 第1号竪穴式住居跡 (S I - 1・西から)

第1号竪穴式住居跡 (S I - 1)



第25図 S I - 1 出土土器実測図



第26図 S I - 1 出土土器

北溝の南側約10mのところでは竪穴式住居跡の一部を検出したが、他の遺構との重複関係が明瞭でないため、全容は明らかでなく、大きさも東西幅は約4mであるが南北幅は不明である。東壁にカマドが造られているが崩壊が著しい。壁高は約35cmで、主軸はN-82° - E、平安時代中期の住居跡である。

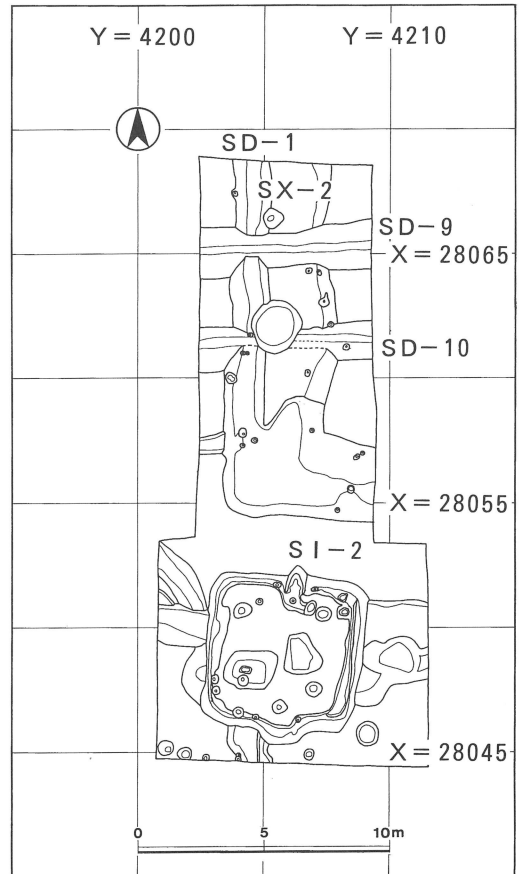
1は土師器の高台付坏形土器でカマド付近から出土した。口縁部を一部分欠損している。口径14.6cm、器高7.3cm、高台の径は8.8cmである。ロクロ成形で、胎土には砂粒を多く含み、口縁部から体部内面にかけての一部分にススおよびタール状の油煙が付着している。

Ⅲ 区

西溝 (SD-1)

第1次、第2次調査で検出した西溝の南側延長部分で、溝が東へ曲がる南西隅を検出した。西溝の大きさは、上幅 1.4m、底幅 0.5m、深さ 0.65m で、断面は逆台形である。今回、南西隅を検出したことにより、創建期の寺域の南限を確定することができた。なお、西面回廊跡と西溝との距離は約 66m であるが、南面回廊跡と南溝との距離は約 110m とかなり広くなる。

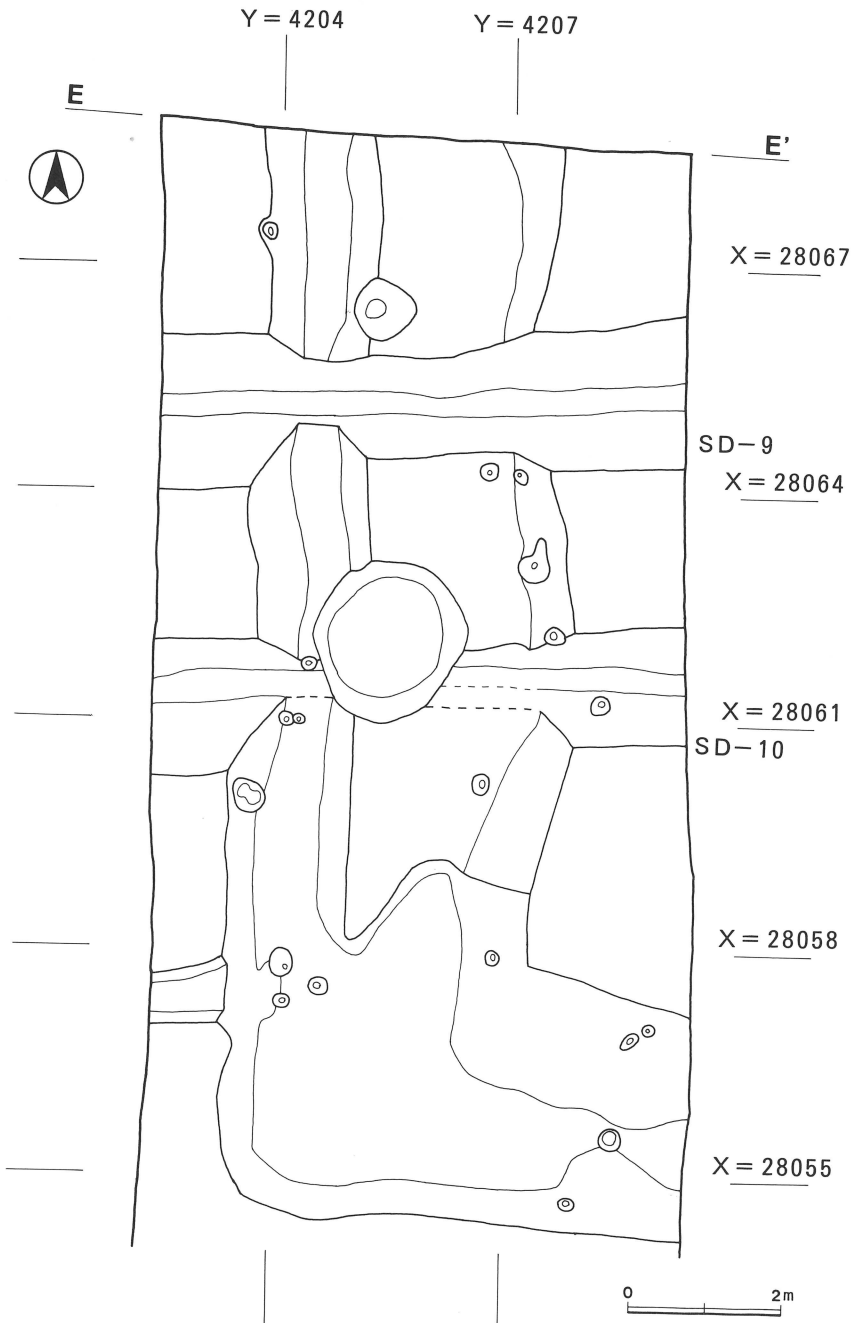
また、西溝を東西に横切るように 2 つの溝が検出された。このうち SD-9 の大きさは上幅 1.4m、底幅 0.5m、深さ 0.65m で、断面は「V」字形、SD-10 は上幅 1.4m、底幅 0.5m、深さ 0.65m で、断面は皿形である。2 つの溝は、西溝が埋没してから掘られているが、溝の用途や時期は不明である。



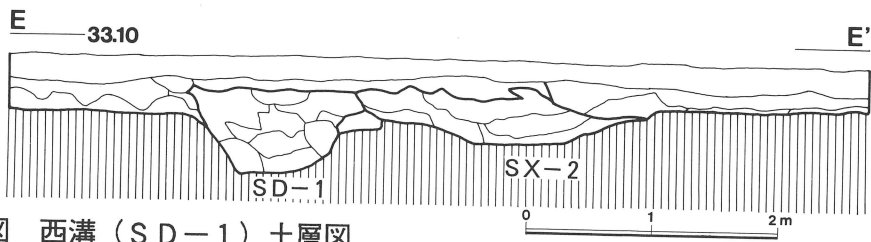
第27図 Ⅲ区遺構配置図



第28図 西溝 (SD-1・北から)



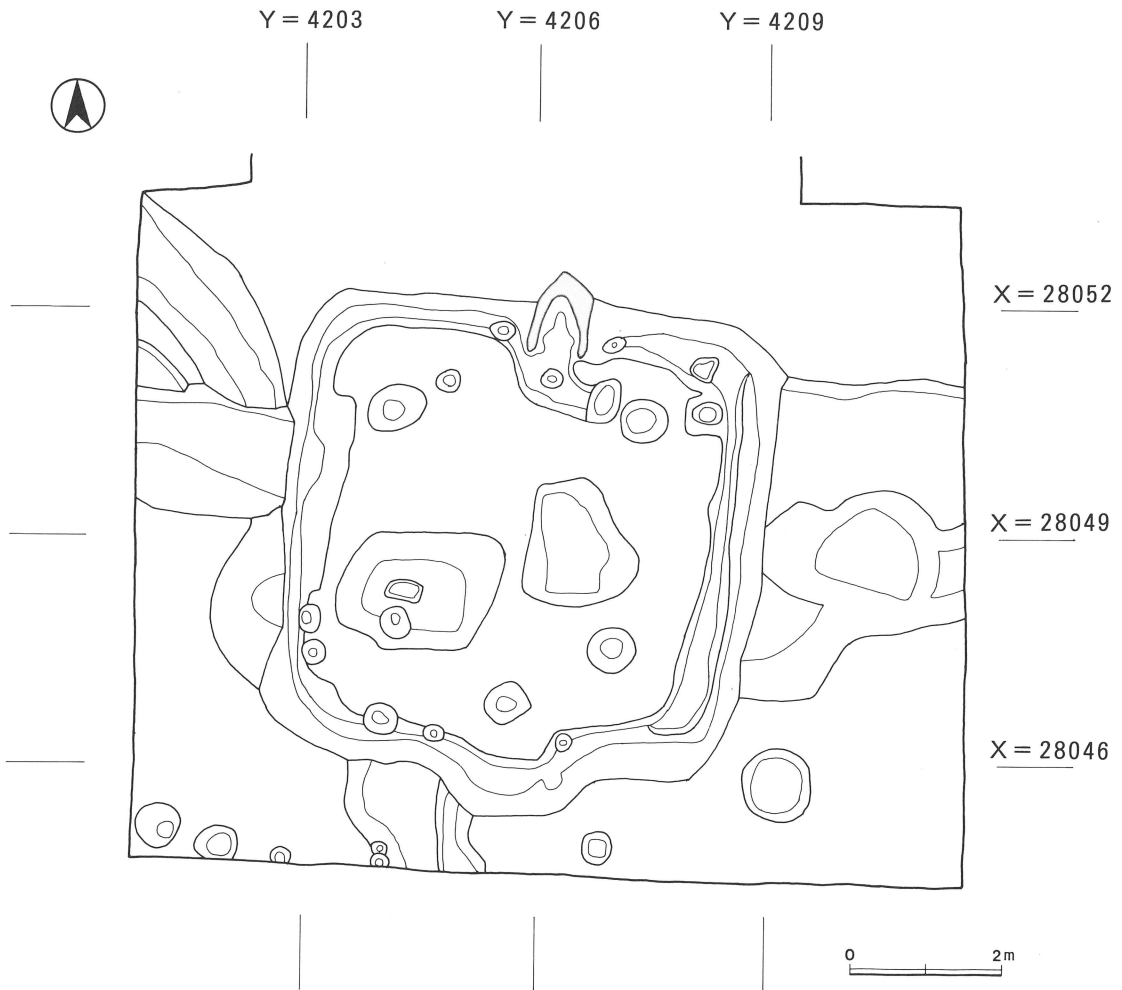
第29图 西溝 (SD-1) 実測図



第30图 西溝 (SD-1) 土層図

第2号竪穴式住居跡 (S I - 2)

第2号竪穴式住居跡は、溝の南西隅から南側約1.4mと近接したところから検出された。大きさは東西幅が6.3m、南北幅が6.2mでほぼ正方形であるが、南壁の中央が約60cmほど張り出しており、この部分が入口になると考えられる。壁高は約50cmである。北壁の中央にはカマドが造られており、袖幅が約80cm、奥行きが約1mで、北壁を約30cmほど逆V字形に掘り込んでいる。カマドは、主に白色粘土を用いて造られており、左袖部には平瓦が補強材として使われている。柱穴は5カ所あり、カマドの両側や南壁張り出し部の両側にも、小さな柱穴状の土坑がある。壁周溝は、西壁、東壁の下が幅広くなっている。主軸はN-6°-Eで、8世紀前半の住居跡である。

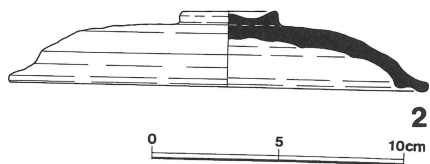


第31図 第2号竪穴式住居跡 (S I - 2) 実測図

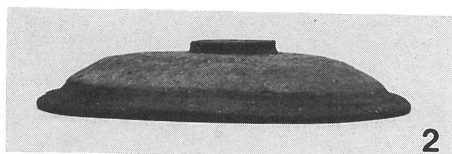
2は須恵器の蓋形土器である。カマド付近より出土し、口縁部の一部を欠損している。口径16.7cm、器高3.1cm、つまみは径3.8cm、高さ0.6cmである。甲の上半にはヘラケズリが施され、内面は平滑で、ゆるやかな稜が多い。口縁部の内面にはかえりが低く突起している。胎土には砂粒および雲母片を多くふくむ。



第32図 S1-2・カマド



第33図 S1-2出土土器実測図



第34図 S1-2出土土器



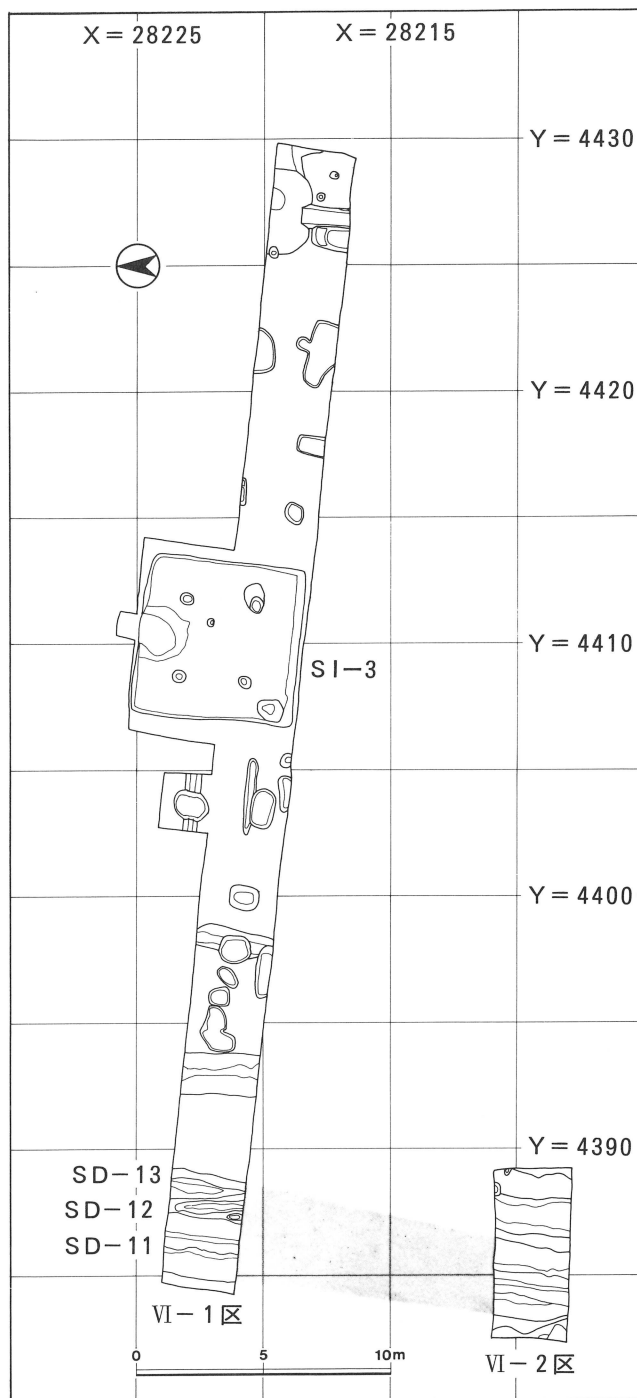
第35図 第2号竪穴式住居跡 (S1-2・南から)

IV 区

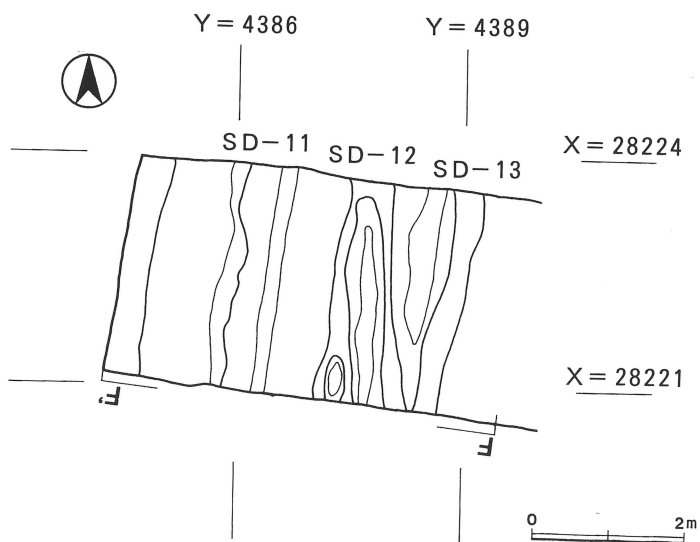
東溝 (SD-11)

東溝は、IV-1区の西端およびIV-2区で検出され、東面回廊跡からの距離は約38mである。大きさは上幅2.7m、底幅0.4m、深さ1.5m、断面は「V」字形で、規模や形態、堆積している覆土などから、北溝と同時期の溝である。主軸は真北より東に振れているため、IV-1区の南側約10mのところにIV-2区を設定して東溝を検出し、主軸の振れを確認したところ、N-8°-Eであった。したがって、北溝の主軸がN-79°-Eであることから、東溝をそのまま北へ延長し、かつ、北溝を東へ延長して、2つの溝が接すると想定した場合には、接する角度は直角よりも鋭角となる。また、溝の中に堆積した覆土の中からは、寺の創建期の瓦が多く出土しているが、覆土の上層からは内耳土器や板碑片などの中世の遺物が出土している。このため、西溝の主軸が、塔跡や回廊跡などの中心伽藍建物と同じく真北であり、10世紀代には埋没していることから、創建期の溝と考えられるの

に対し、東溝は、西溝と比較して、規模や形態も異なり、かつ、主軸も西溝や伽藍建物とも一致しないことから、東溝および北溝が創建期に掘られたものでなく、それ以降に掘られた可能性もあり、来年度以降の調査で、再度確認していく必要がある。



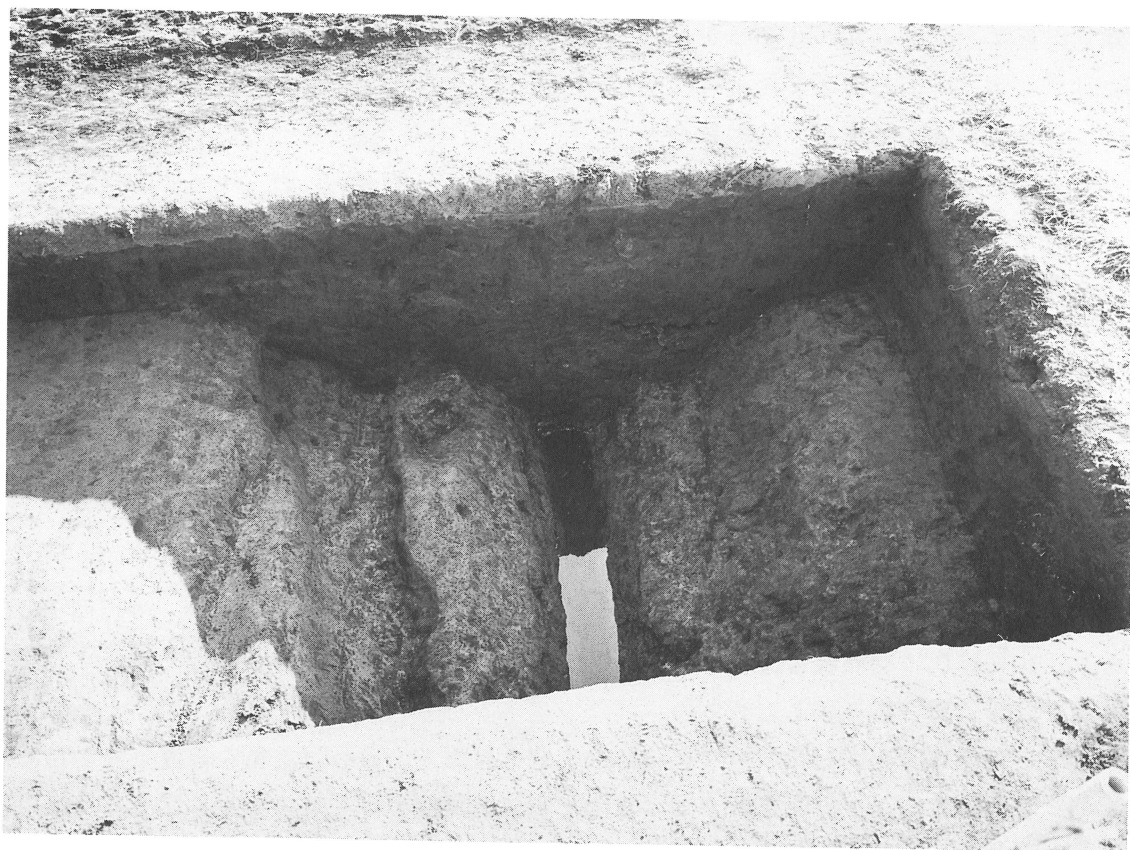
第36図 IV区遺構配置図



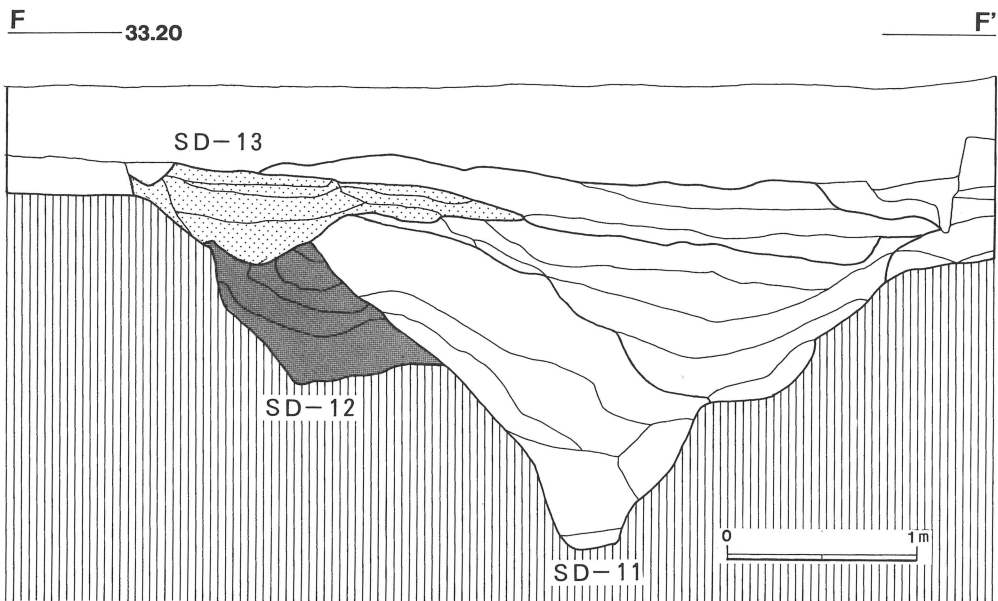
第37図 東溝 (SD-11) 実測図

第3号竪穴式住居跡 (SI-3)

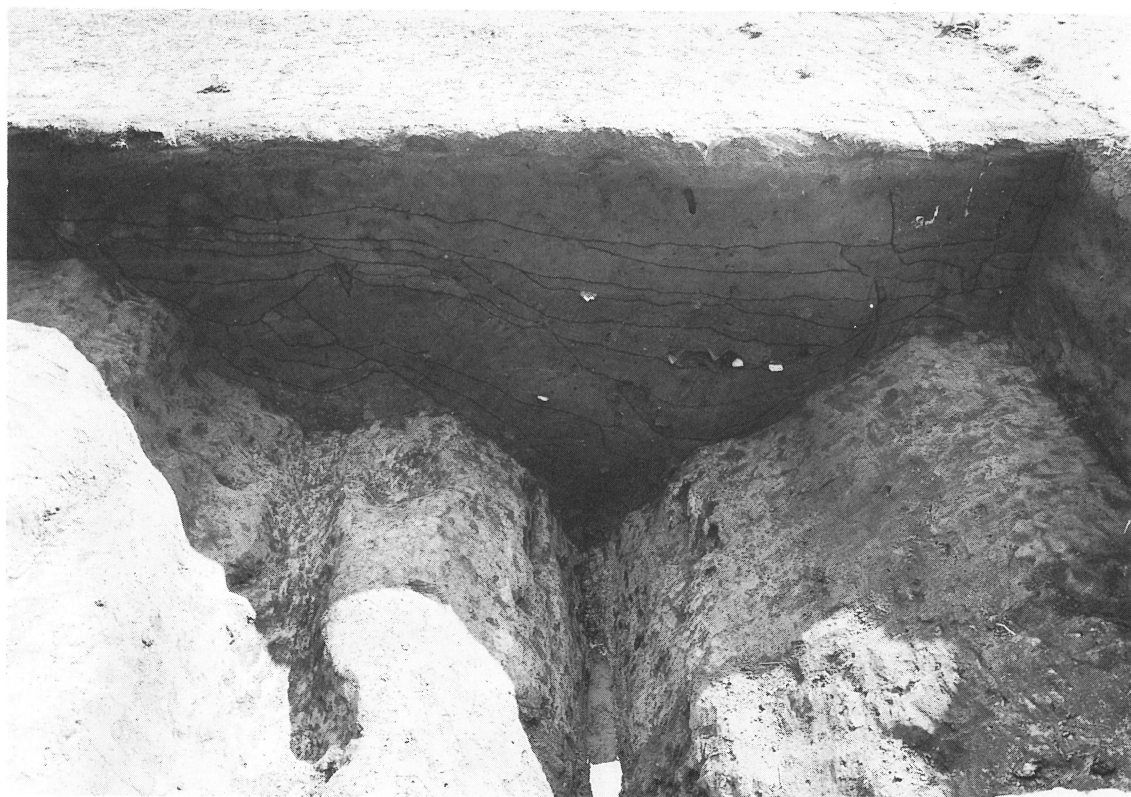
IV-1区のほぼ中央、東溝の東側約20mのところ
 で検出された。大きさは東西幅6.4m、南北幅6.3mの
 ほぼ正方形、壁高は約50cm
 で、北壁の中央にカマドが
 造られている。柱穴は4カ
 所、主軸はN-7°-Eで、
 8世紀前半の住居跡である。
 なお、調査期間の関係で、
 カマドは未調査である。



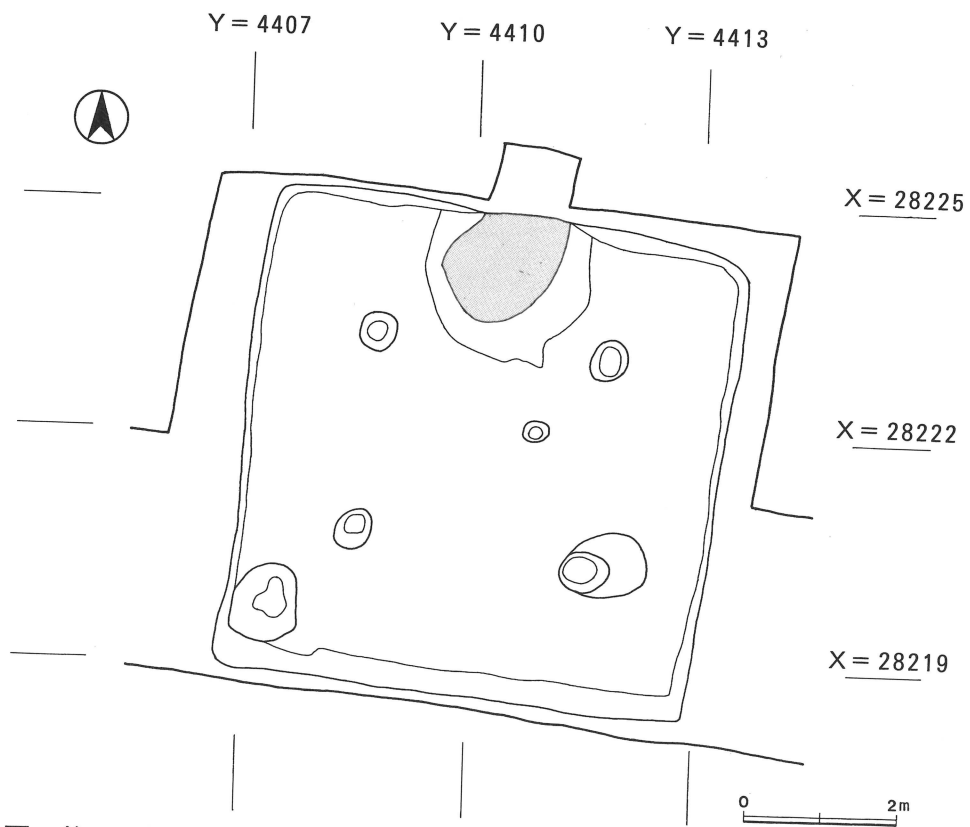
第38図 東溝 (SD-11・IV-1区・北から)



第39図 東溝 (SD-11) 土層図



第40図 東溝 (SD-11) 土層



第41図 第3号竪穴式住居跡 (S I - 3) 実測図



第42図 第3号竪穴式住居跡 (S I - 3・南から)

5. おわりに

結城廃寺の中心伽藍建物跡については、第1次、第2次調査によって、中門跡、塔跡、西面・南面回廊跡などが検出された。今年度の調査で検出された伽藍建物跡は東面回廊跡のみであるが、西面回廊跡と東面回廊跡間の距離から、伽藍中軸線を求めることができ、そのことにより、多くのことを推察することができる。

まず、中門跡では、第2次調査で東半分を検出し、南北幅が約12mであることに對し、東西幅は不明であったが、伽藍中軸線を使って復元すると東西幅は約17.5mとなる。

次に、同じく第2次調査で提出した北方建物跡であるが、東南隅のごく一部を検出したのみで、全体の規模は不明であるが、伽藍中軸線上に建てられていると考えられることから、伽藍中軸線を使って東西幅を復元すると約29.5mとなる。南北幅も明らかではていが、東西幅から推定すると18~20mになり、大きな建物となる。また、本年度のⅡ区で北面回廊跡が検出されなかったことから、北面回廊はⅡ区のすぐ南側に建てられていたと考えられ、その場合、北面回廊は、この北方建物の側面中央よりやや南側に取り付くことになる。また、2棟の掘立柱建物跡は、柱掘方をそれぞれ4カ所検出したのみで、全容は不明であるが、伽藍建物の北側に建てられ、また、東西に長い建物になると想定されることから、僧坊などの付属建物になると考えられる。さらに、掘立柱建物跡と北方建物跡の位置関係を考えあわせれば、北方建物跡は講堂跡になる可能性が高いだろう。

さらにその場合、塔の西向いに建てられていたのは金堂ということになる。このことは、第1次調査で検出された瓦溜めから多量の搏仏が出土したが、これらの搏仏は金堂に納められていたと考えられることから、裏付けられるものではないだろうか。

したがって、第2次調査において想定された伽藍配置は、「法起寺式」「観世音寺式」「薬師寺式」「川原寺式」「大官大寺式」の5型式であるが、本年度の調査により、東に塔、西に金堂が配置される「法起寺式」あるいは「観世音寺式」の可能性が高くなったといえるだろう。いずれにせよ、来年度以降の調査で確認していきたい。

次に寺域であるが、これまでの調査により創建期の寺域の西限を確定していたが、本年度、溝の南西隅を検出したことにより、南限も確定することができた。また、寺域を区画する北溝、東溝も検出したが、この2つの溝は、西溝に比べ規模が大きいことや、主軸が伽藍建物と一致しないこと、覆土の上層からは中世の遺物も出土しており、形態も中世における溝の掘り方である薬研掘りであることから、寺の創建期に掘られたと考えるには問題がのこる。これまでの調査により、廃寺が10世紀頃に一度火災で消失し、その後再建されたと考えられることから、あるいはこの再建時以降に掘られた可能性もあり、寺域についても、伽藍配置同様、来年度以降の調査で再確認していきたい。



結城市文化財調査報告書第6集

結城廃寺第3次発掘調査概報

発行日 平成3年3月31日

編集・発行 茨城県結城市教育委員会

茨城県結城市大字1447番地

印刷 株式会社 昭栄堂印刷

茨城県結城市大字結城10543番地1

